

ボランティア活動を通して学んだこと

加賀 裕子

(18-1, カンボジア, 理数科教師, 横浜市立寺尾中学校)

私がお話ししたいのは、ボランティア活動を通して学んだ事ということでして、この中には、経過が沢山入っていますが、読んでいただいたら分かると思いますので、要点についてはあまり触れないでおこうと思います。

私が赴任したのは中学校の先生を養成するための2年間の養成学校です。カンボジアに6校ありますが、そのうちで一番大きな学校で、生徒数、約700名で、最高30歳までの人が学んでいる学校です。要請内容です。左側が町に入るところになります。右側が学校の正面に入り口になります。

どんなお話をして来なきゃいけなかったかというのが、ここに書いてある内容です。これをもとに活動内容を設定しました。活動目標。自分がやりたかったのは、実際に実験をそこですということではなくて、そこにいる先生方と一緒に学んでいくということをしていきたくだったので、このように目標を設定しました。ただ、大きな目標はここにあったのですが、細かなところでこれをまっすぐ進めていくのか、また、いろいろな寄り道をしていくのか、いろんな先生たちと相談しながら、例えばJICAの方々と相談しながら、こまごましたところはかなり大きな変更をしていくことになりました。

何が変わっていったかという、ここに書かれていることです。最初に予定していたことで、実際行ったことで、大きく変わったのは、下の方の4点だと思います。最初は自分で実験書も作り、自分としての成果を残してこようというのが、目標の中にありました。中にいるうちに、いろんな人と話をしたりしているうちに変わっていったのは、自分がそこで何を残したかったのか、自分の結果を残したかったのか、それとも、そこにいる人たちに何かを経験してほしい、何かを学び取ってほしいというのを残したかったのかというところで、方向性がだいぶ変わってきました。

ここにいるのが、一緒に働いた4人のメンバーです。左上から、上二人が化学の先生、左側の先生が今、ウェブ中には出てくる教員Aという方です。右側が教員B、左下が地学の先生、教員C、右側が、右下が教員E、生物の先生です。

最初の1ヶ月で知り合ったのが、A、B、E、3人の先生です。Aの先生に最初に何を言われたかという、「私は子どもも居るし、忙しいから、実験はできない。」と言われました。私の養成内容が実験だったので、非常にショックを受けたことです。右側の先生は知識力もあり、英語もしゃべれるので、意欲的なのですが「君は、カンボジア語もできないのに何がしたい。」というのを最初に言われて、やっぱり自分としては、非常にショックでした。で、3人目の左下のCという先生は、最初存在も知らずという方で。右下の教員E

という先生には、最初は「いろいろ教えてね。」と言われたんですが、では、「実験に参加させて。」と言うと、「いや、実験は来なくていいわ。」と言われ、何かうまくいくのかなこれから、という印象を最初に持ちました。

それから、いろいろな経過が入ってきました。やっぱり、コミュニケーションを取るのが難しかったので、言葉だけではなく、一緒に時間を過ごすという目的で始めました。学校現場にいた人間としては、人前で何かをしたり、話したりというのが日常的な事だったので、どうしても実験がしたいという気持ちを、向こうの先生たちが汲み取ってくれて、2ヶ月目に実験をさせてくれました。

これが結果なんですけど、全然実験室が使われていなかったもので、10年前に、後で知ったんですけど、ベトナムからボランティアが入ってきて、その人たちが一生懸命やった実験の痕跡だけが残っている実験室だったので、それを片付けて、このころ、さっきの地学の先生に知ってもらえました。この方は非常に意欲的で、何年前かにJICAがプロジェクト、理数科プロジェクトをやって、その講習会にも参加されていた方で、日本語も英語も堪能な方だったので、これから先、私にとって、かなり日常生活でも仕事の面でも、支えていただける方になりました。

この方が教員Aですが、最初に「実験ができない。」と言った方で、いろいろと話をしたり接しているうちに分かってきたことは、結局、実験室の鍵を彼女は持っていないで、自由に入れたい、誰かの許可がある、もしくは、鍵を貰わないと入れないという事と、それから、自分一人でやる自信が無いということがおおまかな大元の理由です。彼女もその昔のJICAのプロジェクトの講習会に参加していたので、実験を習ったことがあるのですが、それを現場で生かしていく事が無かったんですね。で、彼女が最初に言ったのが、「実験をもう一度自分でやってみたい。授業でできるようにしたい。」ということなので、私が日本から持って行ったことを教えるよりも先に、既存のものをきちんとできるようにしようということで、これをやるような実験が毎週繰り返されていきました。ただ、これがずっと継続してするかというと、そうではなく、かなり波がありました。その波も今から思うと、1年目だから分からなかったこと、学校の流れも知らず、急がせるパターンも分からず、そうゆう中で時を過ごしてきたので、なんとなくすっきりしないものがあるというのがどっかにありました。気持ちの中で、周りも同じように派遣されている理数科の教員が、どんどん毎週実験を繰り返して結果を残していくのを見て、やっぱり焦りが出てきたのが、この1学期くらいです。このときに、非常に知的な教員Bの先生に、「1週間に1回実験をしたら実験室が活きるから、やってみようよ。」向こうのリズムに乗らなかったら、何言ってるんだという状態で終わったのは間違いないですね。

1年間がちょうど過ぎそうになるころ、外国語団体「VVOB」はベルギーの団体なんですけど、うちの学校には4つの外国の団体が入っています。日本、アメリカ、ベルギー、イギリス。ですので、その辺の人間関係をうまくまわしながら、話をしていたところ、ちょうどエイズの講習会をするということで、その講習会に携わって、実験をするということ

で、一緒に参加させていただきました。で、すごく自分の中で実験室を片付けるのが遅いことなのかなと思っていたんですが、よくよく考えれば、相手のペースの中に、たった 2 年間自分はあるわけなので、相手がどんなこと気にして、これからどんなことをしていきたいのかということを考えて、実験室の配置、器具の配置、それから片付けをしました。やりたいって話をしたら、その多くの先生たちが結構快く引き受けてくれて、時間を設けて、生徒たちを使って一齐に教室の中を片付けてくれて、非常に協力的になっていったんです。

話は変わりますが、それは彼女が、家で実験のノートを作成していて、これはこんな風にうまくいったとか、自分なりの実験書を作るようになっていったので、方針を変えました。このころから、自分がこうしようというのではなく、こんなことをしたいという風に向こうからいってくれるように経過がかわりました。ただ、その経過のなかでは、私の言葉の変わっていった部分があり、例えば、私が最初の頃は、「こんな実験をしてみた。完成したから、やってみようよ。」という話しの仕方だったのですが、この頃からは、「こんな実験したいと思うんだけど、どうかなあ。一緒にやる？」「やらない」といえばそのまま話は無かったことに。また、同じようなきっかけを幾つか作っておいて、一緒に組み立てていくような形を採りました。

で、ここからは比較的軌道に乗って、活動がいく状態です。最後に、さっきの何度も出てきているこの女性の教員 A の先生がかなり力もついてきていたので、その先生に「中学校の先生、地域の中学校の先生に向けて講習会をしたいと思うんだけど、どうかなあ。」と話したところ、非常に快く引き受けてくれて、その先生たちだけでなく JICA の職員、それから校長先生も非常によく相談に乗ってくれて、実質的に、私は「こうこんなことしたらどうかな。」というだけで、動いてくれたのは先生たちでした。で、そんな中で、任期が終了しました。この活動の中ですごく重点を置いたことは、ここに示されています、一番上の人間関係を作るという点は、主には同僚（直接の仕事相手になる人たち）に対して構築することです。この学校には、私を含めて 3 人の、私が 3 代目の JOCV ということで、先生たちに話を聞いていると、「1 人目はカンボジア語をよくしゃべれると、2 人目はカンボジア語をよく聞けたと、きみはコミュニケーションが上手だね。」と言われたことがすごく私にとっては意外なことでした。私の中では、コミュニケーションは日本語を、ネックになっていたところだったので、それが非常に嬉しかったです。そのことから、自分が去った後、自分がどのように言われたいかというのを探すようになりました。1 番思ったのは、3 人目は「ありがとう」という言葉を沢山言っていた。というのをモットーに今までやってきました。同じ学校にも、さっきも言いましたように、いろんな人たちがいて、それから、元 JICA の専門家の方だとか、JOCV だとか、そういう人たちがいましたので、いろんな意見を聞いて、いろんな意見を収集した上で、自分の方向性を探っていくというのがこの 2 年間の流れのようだったと感じます。

そうですね、長期的には、一番下の長期的な視野の中で「今」を思うことが一番難しか

った気がします。なぜかという、今しか見えないことが非常に多いので、長い期間の一転としてそのときを見ることで比較的焦ることなく進めていくことができたかなという気がします。

左側が、入学説明会、保護者説明会の様子です。右側が、たまにまたフランスから、フランスの学校の休みを利用して高校の先生が、自主的にボランティアに来て生物を教えてください。彼らは 2 週間くらいしかいないので、結局、その実験とかやったことを、一緒やっていくのは私なので、積極的に参加していくと、その後、生物の先生たちから、こないだ一緒にやったことをもう一回やりたいんだけど、という風に声をかけてくれるので、活動がしやすくなりました。

で、この真ん中の写真は、先生と生徒たちが集まってしたパーティーをしたときの様子です。学校の中だけではなく外の活動を一生懸命やろう、一生懸命こなしていこう、積極的に関わっていこうと思ったので開きました。左側はうちの学校で働く団体の人たちです。彼らがパーティーを開いてくれました。右側は、また左側をもとに人間関係が広がっていった、4つの国からのメンバーです。というより、比較的日本人の中に居るといって、いろんな国の人の中の、一人の日本人として活動していった感じがあります。この 2 年間を通じて、自分の中で何が変わっていったのかな、というのがそこに示されています。それは、今でも教員として思っていて、一番、こう、うまく今でも働いているかなというのが、上の大きな枠からいうと、上から 3 つまでです。特にこう、学校の中で、今の話になるんですけど、学校の中に居ると、流れの中に流されていくような感じがあるのですが、そうではなく、こうきちんと自分の考え方を持ってやっていくようにしました。向こうで、私が最初に厳しかったのは、ぼーっとしたり、のんびりとおしゃべりをする時間が持てなかったことです。忙しい日本の生活の中に居たので、その時間の価値というものが分からなかった。その中で同僚がどう変わっていったか、上 3 つは同僚全員に、ほぼ全員に関係してくる部分です。例えば、教科に関係なく、クメール語、カンボジア語の文章を作っていくと、裕子お前なにしてるんだ？ちょっと見てやる。文章作ってくれたり、何かを作っても、その手伝いをしてくれたり、運んでくれたり、非常に協力的な感じでした。下の 4 つは直接こちら、教員に関係してくる部分です。この 2 番目が自分の中でも一番印象に残っていて、最初、教員 A と教員 B の人間関係が非常に悪くて、いつも教員 A の人と話をするとき B の先生の悪口を言われ、逆に B の先生と話をするとき A の先生の悪口を言われ、結局、真ん中で、いや、そういうことじゃないんじゃないのとか、いろんな話をしていました。で、そのことを繰り返していくことと、実験の能力を身に付けていく、その差が生まれてくると、最初は全然できなかった A 先生が、2 年後には自分で実験書も書き、予備実験を自主的にし、という風に、すごく見えるようになったんですね。

B の先生がどうかという、知識力はある、実験も自分でできると思っている部分があるので、A 先生に比べたらすごいできると思っている。それが自分の中で優位に立っている部分だったのかなという気がします。それが 2 年後逆転してきたので、コミュニケーション

の形が非常に変わりました。上から話すのではなく、双方向の人間関係に変わり、お互いを認め合う部分ができきたように感じます。一番下の部分は最初は全然知らなかったのですが、校長先生にいてお話をし、自分の好きな時にやれるようになって、良かったかなと思います。

この2年間で学んだことはここに書かれている、今一番思うのは、人の心の温かさだとか、お互いが自分が協力してもらっただけではなくて、協力していくことの大事さだったかなと思います。いろんな人と触れ合う中で、建設的な考え方を持っている人と出会うことが多かったのも、その人たちから学ぶことが多かったんです。こんなことがあるんだけど、こんなことがあったんだけど、こんな話をすると、じゃああなたはどうしたいの、という方向にすごく話を持ってきてくれるので、悩むこともほとんどなく、お話できました。一番、いろんな人たち、いろんな国の人たちと出会うことができ、国民性というより、国ではなくその人自身がどんな性質、性質というか性格を持っていて、どういう風に接していったらいいのかなということも学びました。そういう意味では、日本人というの枠で自分を見られるのが嫌だと思いました。

そういうことも踏まえて、今何をしてるかというのを説明します。すごく帰ってきてから思ったことは、この2年間というものは、非常にまったく違う環境に置かれるので、いろんなことが目に飛び込んできやすいですけども、同じようなことは日常、日本にいる日常にもあることなのかも。なので、日々目的意識をしっかりと持っておいて、今こうしているのは、このため自分はこうしたいから、こうなりたいから、という目的に向かってやっていく、というのを持っておこうと感じました。帰ってきて、すぐ中学校3年生の担任をやらせてもらって、中学校の中でも一番ナーバスな時期で厳しいですね。そこに入れさせていただいたので、非常に勉強になっている部分もあります。ただ、帰ってきて直後で良かったのかなと思う部分は、自分の中にどこかのんびりとしたものがあるので、受験期真っ只中なんですけど、子どもたちのなかにはどこか穏やかな気持ちにうかがえている気がします。

3つ目は、AETの英語の先生がイギリスから12月まで来ていました。この方は非常に協力的な方で、普通英語の授業だけでなく、理科の実験の時だとか、お昼ご飯だとか、部活とか、それ以外のところで、子どもたちが比較的自由に会話ができる状態の中でしてもらっていました。その彼も英語の授業とは全然違うコミュニケーションがきちんと取れるのは、授業以外だと気付いてくれたようで、そのあと部活動に参加もしてくれていました。

学校以外のところでは、やっぱり今というものを大事にしていこう、どんな状況に置かれていても、気持ちの持ち方で変われるものは変わっていくのかなと思うようになりました。それから、いろいろあるかと思いますが、一人の日本人として、過ごしていきたいとおもいます。ありがとうございました。